いのなら、ふつうは２～３回で終りだ。原告らは、本件訴訟の対象外のことばかり云ってきた。チェルノブイリ事故についての文書でも、本件訴訟と何の関係もないと主張しておいた。対象外のことを何年やっても無意味だ。

原告　代理人を置けというが、国が金を出してくれますか。病気だったら出られますか。

原告　私たちこそ、一刻も早く裁判を終らせたい。しかし、スリーマイル島事故の時も国は放置できなかったでないか。現実に起こったことを無視しては裁判はできない。

検事　本件安全審査が対象で、どこでどんな事故があっても、本件審理と関係ない。

原告　審査していないことを主張するのは当然だ。航空機墜落問題はそのいい例だった。

検事　本件審理は、２号炉が安全かどうかと関係ない。（法廷内にどよめき）

原告　スリーマイルやチェルノブイリ事故は、安全審査の欠陥の証拠だと私たちは主張してきたのに、無関係とは何か。あなた方がそう主張するのは勝手だが。

原告　私たちは始めから、炉心溶融は起こると主張し続けてきた。それに、関係ない、とは裁判のぶちこわしだ。

検事　関係ない、という文書は出してある。外国で何が起ころうと関係ない。

原告　同じような議論が山下裁判長の時にもあったが、結局、スリーマイルもチェルノブイリも、とりあげることになった。具体例の議論を通して、はじめて安全審査の内容も明らかになると思う。また、八幡浜で裁判すれば、出席率もずっと良くなると思う。

原告　国は、法廷では、関係ないと云っておきながら、法廷外では、何でも審査しているように発言している。私たちは、審査のワクを押えるために努力してきている。また、欠席者を相手にしないということは、審査と何の関係があるのか。

検事　それは誤解だ。

原告　これまで、何でも文書で、と云ってきた国が、どんどん発言するいい例を作ってくれました。どうかこれからもそのように。

原告　準備書面を当日出すことに文句を云っているが、第８回公判で、「なるべく早く出す」ときめたのに、その次の公判で、「いや、あれは努力目標だ」と、約束を破ったのは、あなた方だったではないか。

裁判長　両方の意見をいろいろ聞いたのでそれを基に、これからの訴訟の進め方をきめていきたい。

（以下次号に続く）

会計報告（ '88.5／1～5／31 ）

収入	
会　費	14,000
ニュース購読料	55,250
カンパ	10,000
コピー代金	930
計	80,180
支出	
ニュース印刷代	25,000
郵送料	9,150
振替手数料	300
資料費	26,180
事務費	210
２号炉公判支援	30,000
弁護団弔慰金	28,000
計	118,840
差引	−38,660
積立金合計	1,557,669

伊方訴訟ニュース

第178号
1988年6月15日

伊方原発訴訟を支援する会　連絡先 〒530 大阪市北区西天満4−9−15 第一神明ビル
藤田法律事務所 ☎06−363−2112 口座大阪3−48780

「裁判に欠席する原告らは相手にしない」
新裁判長を威圧する訟務検事に原告ら猛反撃

５月２５日。はじめての午後からの開廷に松山地裁前には、ひるすぎから人の列ができる。ほとんどが支援の人たちで、傍聴券を配る頃には、定員を２０名ほど越え、前回同様抽選に。松山のお母さんたちとともに、大分、福岡、高松、大阪、東京など各地からの人たちも入廷。原告団が交渉し、裁判長の許可も得て、記者席の空席分だけ追加の傍聴券が。

定刻１４時を少しすぎた頃、山下裁判長と交替した八束裁判長が、やはり新任の右陪席と、これも交替まもない左陪席とともに入廷。

すかさず原告席から西園寺さんが立ち、「裁判長らの顔が違うが変わられたのか」と。裁判長は「そうです」と答えた後、「裁判所の構成が変ったので、弁論更新の手続きを取りたいが、従前どおりでよろしいか」と、型どおりに発言。

こんどは被告席から、国側筆頭代理人格の訟務検事がすかさず立ち、「裁判の進行について意見をのべたい」と申し出る。原告席からも、「裁判長に聞いてほしいことがある」との要望が出る。裁判長は、まず、裁判の進行についての国側の発言を許し、これに応じて立った訟務検事は、以下のような主旨の、原告らへの攻撃発言をまくし立てた。

「本日の法廷にも、２７，８名いる原告のうち１０名しか出席していない。過去１０回の法廷をふり返っても、皆出席しているのは数名にすぎない。この訴訟は、代理人を置かない本人訴訟としてやっているのだから、これからは、出頭当事者だけを相手に裁判を進め、欠席者は相手にしないことにしたい。

また、原告らに聞きたいが、これまで１回も出廷していない何名かの原告はどうしているのか。また、川口、奥本の２名は死亡されたようだが、あとを継承する人はいるのか。

それから、訴訟が始まってから１０年たつが、原告らは、訴訟の請求原因をまだ明確にしていない。つまり本件原子炉の設置許可の違法事由を主張すべきなのに、国の内外で起こった事故を、あれこれあげつらうだけで、肝心のことは主張していない。このままでは時間の空費なので、原告らの主張の内容、あるいは時間を制限してほしい。

また、本件のような大変な裁判を、代理人も立てずにやるというのは無理だから、準備手続きに移行するように要請したい。

さらに、準備書面というのは弁論の準備の

ために必要なものであるから、いつも原告がやるように、当日に提出して陳述する、というのは無意味だからやめてほしい。

なお、本日は、あとに用務があるので、3時半までにしてほしい」と。

このように横柄で、これまでの裁判の経過の実態をねじまげた発言が終るや、原告席からは、発言を求めて一せいに手があがる。そしてそれから約2時間にわたって、以下のような激しい応酬が、原告らと訟務検事の間で展開され、裁判長も、ほとんど介入できない有様であった。

原告　欠席者が裁判をやる気がないと、どうして判断したのか。この裁判が始まる時、裁判長らと会い「準備書面はよう書かん」と話したら、「それは損だから箇条書きででも出しなさい」と云われ、それ以来、すべて納得ずくでやってきたのに、今さら何を云うか。

原告　私も欠席したが、次の公判で認否の確認をとってきた。

原告　私たちの欠席を云々するが、あなた方の中に10年前の人が居るのか。欠席者を相手にしないとは、国民の裁判権を奪う発言だ。また、10年間の裁判の内容にふれない勝手な発言は許せない。裁判の始めに、裁判官の忌避を申立てたが、それに1年半もかかった。（以下7頁右に続く）

原告準備書面

ーチェルノブィリ前夜の出力調整実験ー

（1988年2月26日提出）

（その3）

(三) 原子炉の制御

ー中性子制御に失敗すれば核暴走ー

前項(二)で示したとおり、チェルノブィリ原発事故は、定格出力（百%）から、一三時間五分かけて五〇%に出力を低下させ、そのままで九時間低出力運転を続け、更に出力を下げようとした際、自動制御に切りかえた時の操作を誤り、出力が五〇%から、突然、停止寸前の一%以下の出力にまで急降下したことに端を発している。そして、その状態から短時間、即ち三〇分ないし四〇分程度で出力を二〇万キロワットに戻したが、それから、わずか二四分もたたないうちに核暴走が起き、原子炉も建屋も吹き飛んだのである。右の、誤操作による出力急降下という点は、なぜか、ソ連報告書がこれみよがしに掲げる6つの規則違反に含まれておらず、日本の特別委員会報告書でも、ほとんど評価の対象にしていない。その後の二〇万キロワットの維持を問題にしているが、「自動制御」と叫べば、何もかもうまくいくかのように主張する四電や被告にとって、自動制御にする際の誤操作で、一挙に崩壊のプログラムが始ったという事実は、なんとしてでも表面化させたくない事態であることは疑いない。

この恐るべき大事故、核暴走事故を理解するためには、何よりも、原子炉における出力の上昇・下降がどのような原理、仕組みで生じるのかを知ることが不可欠である。以下に、九州大学工学部の平井孝治助手が、出力調整実験・調整運転について、その仕組みと問題点を的確に述べておられる資料があるので、これを追って内容をみてみたい。文中の番号は、補充証拠及び補充説明を示しており、平井論文の後に記載している。なお、文中の一部は、本件二号炉に合わせて訂正している。

なぜ「出力調整実験」は危険なのか

こたえる人＝平井孝治

—恐怖の伊方実験

—四国電力の伊方原発二号機で、10月19日から21日まで、関西電力や九州電力の立合いのもとに、出力調整試験が行われたということは、大変なショックでした。しかも、88年2月には、さらにエスカレートした形での実験が行われるということで、対岸の大分県側で反原発運動をやっている者達の間では、一種のパニック状況が起きているほどです。

そこで今日は平井さんに、この実験がどんなことを意味し、なぜこわいのかなどを説明してもらいたいと思うんです。

まず、単的にいって、出力調整運転とはどういうことですか。

平井　かりに許可出力が一〇〇万kwとしますと、これまではずっと一〇〇万kwで運転していたわけですね。それを、たとえば電力需要の多い昼間は一〇〇万kwで運転するが、需要の少い夜は五〇万kwで運転しようというのが、出力調整運転なんですね。ですから、低出力運転ともいいます。あるいは、もっと正確にいえば、電力需要に合わせた運転をするという意味で、負荷追従運転ともいいます。負荷というのは、電力需要の変化するカーブだと思って下さい。そのカーブに合わせた発電をしようということです。

—10月19日から伊方で行われた第一回目の実験は、どういう実験だったのですか。

平井　一〇〇%の出力で、12時間運転したあと、3時間で出力を五〇%に落とし、五〇%出力で六時間運転したあと、また3時間で一〇〇%出力に戻しているんですね。大変急激に出力の上げ下げをしているわけです。

—これまでは、出力の上げ下げにはどれだけの時間をかけていたんですか。

平井　定期検査が終って、運転を開始して出力をあげていきますね、これを「立上り」といいますが、一〇〇%出力に立上るまでに、だいたい一週間から一〇日かけていたと思って下さい。

—エーッ、一週間から一〇日もかけていたことを、3時間でやろうというんですか。

平井　いかにものすごい急発進、急停止か分るでしょ。これまで一週間も一〇日もかけていたのは、そうしなければならないだけの理由があったわけですよ。それを3時間で上げ下げする。

さらに、2月に予定されている実験では、1時間で上げ下げしようとしているんですね。考えただけでゾッとしますよ。②

—他の国でもそんな実験やってるんですか。

平井　この運転というのは、核の反応条件が非常に厳しいものですから、従来どこもやってなかったんです。ただ、フランスではやってるんじゃないかという話はあります。とりわけ、原発の先進国アメリカでは、こんな危険な運転はやっていませんね。

—昨年のチェルノブイリの事故が低出力試験の失敗の結果といわれていますが……。

平井　要するにあの実験は、一〇〇万kw出力の原発を六万kwという低出力で運転していて、そこから三〇万kwに出力をあげようとして失敗し、核反応度事故を起こしたんですね。③

ただし、これは負荷追従運転のための実験ではありません。

—**原発がふえすぎた皮肉**

—それほど危険な実験を、なぜあえて日本はやろうとするのですか。

平井　これは先程いいました負荷追従のためなんですね。電気というのは、造り溜め貯い溜めができないですね。だから、時々刻々使われている電気の量に合わせて発電しなきゃならない。こういうふうに、使われる電気に合わせて発電することを負荷追従運転といいます。

そこで、一日の需要でみますと、夜明け前の午前4時から5時までが一番需要が低いんです。それから10時間足した昼間の午後2時から3時までが一番高くなります。このカーブに合わせて調整しようというわけです。

—従来は、どういう形で調整してきたんですか。

平井　図1（次頁）を見て下さい。従来ですと、まだ原発のシェアが低かったので、原発をフル運転しても、需要の底の部分をになう役割だったんです。これをベース・ロードといいます。

それで足りない部分を火力で調整する。ミドル・ロードですね。それでも足りないピークの部分を水力が調整するという任務分担があったわけです。

ところが、原発がふえてきたために、電力需要の落ちる正月なんか、原発をフル運転したら、もうそれだけで需要をオーバーした発電になってしまうよ

うになったんですね。図2がそれです。

こうなりますと、原発自体の出力を調整せざるをえないということになります。④

―原発をふやしすぎた皮肉ですね。

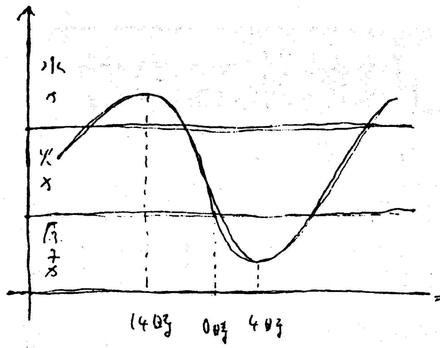

図2

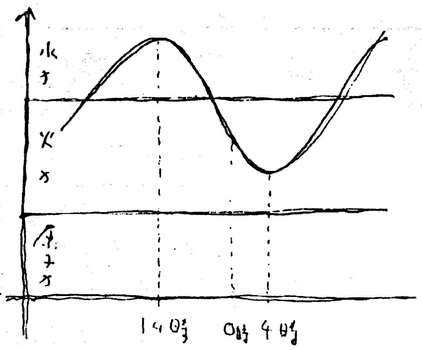

図1

平井　そうなんですね。それと、こういう問題もあるんです。従来は原発を9カ月運転して3ケ月を定期検査で休ませるという一年サイクルできてたんですね。そうすると需要の落ちる冬場に定期検査で休むという調整ができた。

ところが、長サイクル運転でやろうという考え方が出てきてですね、将来的には18カ月運転、1.5カ月定検にしようとしてるんです。運転期間を二倍にして、逆に検査は半分の期間ですませようというわけです。これでいきますと、必ずしも冬場に定検が入ることにならない。そこで、どうしても原発の調整運転が必要になるんです。⑤

―それもこわい話ですね。運転は倍にして検査を半分にするというのも。当然これは経済性の問題からなんでしょうね。

平井　そうです。一〇〇万kwの原発を一日休ませれば三億円の損なんです。火力で燃やさねばなりませんからね。原発というのは先行投資が莫大ですから、使わなければ損が大きいんです。だから、一日でも多く運転しようということになる。

―**中性子制御**

―出力調整がなぜ危険なのかについて、技術的な解説を聞きたいのですが、そのためには原子炉のしくみから理解する必要がありますね。

平井　そのもひとつ前に、核分裂の話から入った方がいいでしょうね。

図3を見て下さい。ウラン二三五、これは広島の原子爆弾の原料です。このU235に、中性子（nと略す）一個が飛び込んで、U235が割れるんですね。大体、二個ないし三個くらいのかけらに割れる。これが核分裂ですが、この核分裂で生成されるのが死の灰です。なぜ死の灰かというと、これが放射能だからなんです。それと同時に中性子がおよそ二個出て来る。さらに熱エネルギーが出てくるわけですね。この熱エネルギーを電気に利用しているわけですね。（もうひとつの核分裂として図4があり、こちらではプルトニウムが生成されるが、今日のテーマでは触れないことにします）

ポイントは、一個の中性子が飛び込んで、二個の中性子が出てくることなんです。このまま放っておきますと、この二個の中性子がそれぞれにまた別のU235にぶち当るわけですね。そして、そこからまた二個ずつの中性子が出てきますから、核分裂の連鎖反応が起きて、二が四になり、四が八になるというふうに倍々ゲームになってしまう。しかも、その反応が一秒の一〇〇万分の一くらいの間にダーッと起こっちゃう。これが原子爆弾なんです。

図3

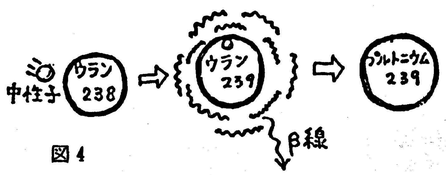

図4

そこで原子力発電のポイントは、二個出る中性子のうちの一個をいかに吸い取るかということですね。倍々ゲームにさせないようにする必要がある。

―なるほど。中性子の制御ということを聞きますが、そういうことなんですね。

平井　そうなんですね。原発の場合、死の灰を閉じ込めるということが重要ですが、それよりもなによりも、中性子の制御が第一のポイントです。これができなければ核分裂が暴走して、原爆になっちゃいますからね。

そこで、中性子の制御には、おおざっぱにいって二つの方法があります。

図5（次頁）を見て下さい。四国電力や九州電力が採用している加圧水型軽水炉（PWR）の図です。

原子炉の中に燃料棒が並んでいますね。燃料棒についてはあとで説明しますが、要するにウランがこの中に入っている。

燃料棒の間に制御棒というのが差し込まれているでしょ。これは主にカドミニウムで出来ていますが、これが中性子を吸収する役割をしている。

もう一つは、ホウ酸ですね。ボロン

ともいいます。これが水の中に混ぜられて、やはり中性子を吸収します。

―制御棒は上げたり降ろしたりして制御するわけですか。

平井　そうです。この図5のように制御棒を燃料棒の下まで降ろしてしまえば、原子炉は停止ですね。

―**発電のしくみ**

―中性子制御の方法は分りましたか、図5を見ながら、原子力発電のしくみを分りやすく説明して下さい。

平井　原子炉圧力容器を見て下さい。その比較的底の方に燃料棒が入っていますが、この原子炉の中には約一五〇気圧に加圧された水が入っています。

燃料棒の中は核分裂の熱によって、C二六〇〇度の高温になっていますが、この熱を受けて、原子炉の中の水は三四〇度に達します。

この一次系の（三四〇度の）水が蒸気発生器を通るときに、二次系の水に熱を伝えて、ここで蒸気が発生し、この蒸気がタービンを廻し発電機を動かして発電するというしくみです。

―一次系と二次系の水は、直接には接しないわけですね。

平井　ええ、一次系は燃料棒に直接触れていますから、放射能を帯びています。一次系の中だけで循環しています。

しかし、玄海原発で見られるように、蒸気発生細管は穴が空きやすいですから、二次系に放射能が洩れることはありますね。⑥

―さっき、中性子の制御の一つとして、水にホウ酸が混ぜられてるといったのは、原子炉の中の一次系の水ですね。

平井　そうです。

―伊方での実験には電力会社の他に三菱重工が立合っていますね。

平井　今回の実験を主導しているのは電力会社ではなくて、三菱重工の核燃料部なんです。

出力調整実験のこわさを分っていただくためには、燃料棒の説明が必要ですね。

図6を見て下さい。U235を焼き固めてペレットにします。これをジルコニウムという合金のさやに入れたのが燃料棒です。長さにして4メートルくらいですね。これを集めたのが燃料集合体です。図にありますね。

ここで知っておいていただきたいのは、集合体を束ねるときに、燃料棒をぴったりくっつけて束ねているんではないということです。そんなことしたら大変ですね。互いの燃料棒の高熱で溶けてしまいます。水が間を流れるように互いの間に三・四ミリの際間をつくって束ねているんです。

で、この燃料集合体を一〇〇体から二〇〇体集めたのが炉心に入っています。もちろん、この数の多いほど出力も大きくなります。⑦

―で、この中に中性子を入れてやれば核分裂が始まるわけですね。中性子はジルコニウムのさやを通して中に飛び込むわけですか。

平井　そうです。中性子を通さないのは鉛ですから、原子炉圧力容器は鉛を主に作られています。

そこで、先程中性子を吸収する制御を制御棒とホウ酸でやるといいましたが、主にはホウ酸なんです。

といいますのは、制御棒を上げ下げしますと、制御棒に近い部分と、離れてしまった部分で、一本の燃料棒でも核分裂の反応が違ってくるわけです。そうすると燃料棒にひずみが生じますから、なるべくなら制御棒は動かさずにホウ酸で中性子を吸収したいわけです。

―**危険がいっぱい**

―そこで、急激な出力の上げ下げがどういう点で危険なのかという、一番かんじんな点ですが……。

平井　これは問題点が沢山あるんですが、分りやすくて重要な点にしぼってみましょう。

まず常識的に考えても、熱による疲労という問題があります。

たとえば私達が針金を手で切ろうとするとき、力学的な疲労を与えますね。針金を折ったりひねったりして、そしてプチッと切っちゃいますね。これを力学的な疲労としますと、燃料棒の場合は熱的な疲労が起こるんです。熱くなったり冷えたりという温度変化が一

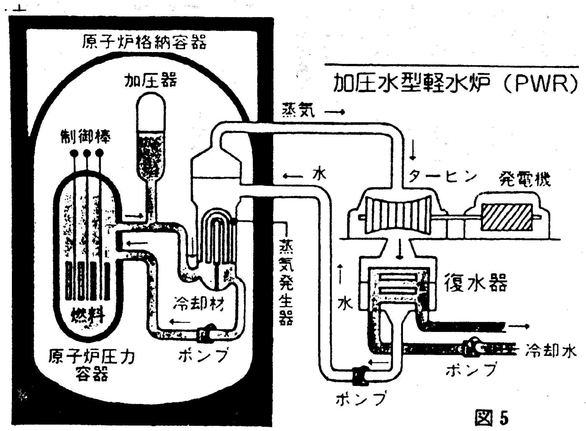

図5

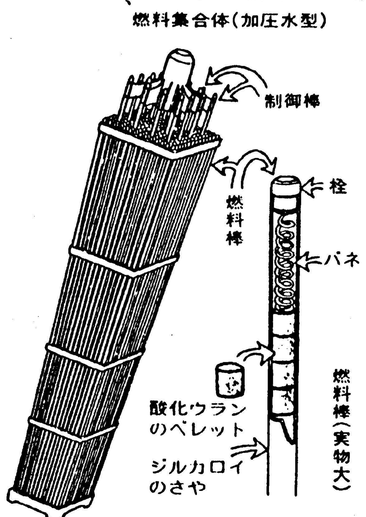

図6　「原発はなぜこわいか」より

（２頁から続く）　国の答弁書には「世界中のどの原発も放射能を出したことがなく、それが安全の証拠」とあった。しかし１年足らずでスリーマイル島で炉心溶融が起こり、国も新たな書面を出さざるを得なかった。

そして、私たちが四つの書面を出して主張を続けていた最中に、あのチェルノブイリ事故が起こり、その「死の灰」が私たちにもふりかかるという事態となった。だから前任の山下裁判長も、あの事故についての見解を提出するよう同に指示したではないか。

原告　チェルノブイリ事故についての見解も１年数ケ月かかって、やっと出てきた。しかも、４０兆円も予算のある国が、証拠の印刷が間に合わなかった、ということだった。裁判長の交替を機に、裁判をつぶそうという意図としか思えない。

また、３時半までというが、私たちには、夏休みも冬休みもない。あなた方の都合だけで認めるわけにはいかん。

裁判長　なるべく静かに発言して下さい。

原告　裁判長は冷静にといわれるが、私たちは伊方原発の事故におびえ、仕事をしながら準備書面を作り出廷している。ところが同の方は２～３年で交替し、何の責任も負っていない様子で、前から何か云いたいと思ってきた。そこへ、裁判長がこれまでの裁判の経過を知らないことをいいことに、原告にはやる気がないといわれ、怒るなというのは無理だ。時間短縮の要求こそ、やる気のない証拠だ。仕事を休んで出ている私たちのことを考えたことがあるのか。

検事　われわれは代理人だから、変わってもどうということはない。欠席する時は代理を立て正規の手続きをとればいい。そうしな

—平井論文の添付番号に照応する各証拠及び説明—

①（甲２１号証の４）

②（甲２１号証の７、ｐ３５右側上から十四行目）

四電は当初、第二回の実験内容について、全く内容を明らかにしなかった。このため、右論文などにより、住民、報道関係者からの「次は一時間での五〇％出力上昇実験ではないのか」との問いかけに対して、答えないものの否定をしなかった。

③乙第二四号証、同二五号証の事故の概要の項。但し数値は電気出力。

④（甲２１号証の８）

⑤（甲２１号証の９）

⑥（甲２１号証の１０）

⑦二号炉は核燃料棒一七九本が一集合体となり、集合体は一二一体が一炉心に装荷される。従って、核燃料棒の総計は二万一千六百五十九本が原子炉内に存在する（乙第一号証）。

⑧（甲２１号証の１１）

⑨（甲２１号証の３、左記事）

⑩（乙第二四・二五号証事故概要の項）

⑪（甲２１号証の７、ｐ３５左側上段六行～一八行）

なおこの項については、今回の実験の際に、緊急停止条件を故意に緩和して実行した疑いがある。次章に示す。

⑫（乙第二四号証のｐ４１、及び同ｐの注の項）

⑬（甲２１号証の１２）まやかしの原発経済論は最早、死に体である。

日に二度も起きるんですから、これによって燃料棒の疲労が大きくなる。

—ジルコニウムのさやの厚さはいくらくらいですか。

平井　加圧水型で〇・六ミリです。内部は〇二六〇〇度、外は三四〇度というものすごい温度差をこの薄さで支えているわけです。

もともと燃料棒のさやというのは、矛盾した存在なんですね。核分裂によって発生した死の灰（放射能）をさやの中に溜めて洩らさないようにしなければならない。そのためには、本当は厚い方がいい。ところが、同時に外の水に熱を伝えなきゃ意味がない。そのためには薄いに越したことはないという矛盾した機能を要求されている。

そんなきわどいジルコニウムのさやに、一日に二度も急激な温度変化を与えるんですから、思っただけでゾッとしますよ。

私の聞いたところでは、原子炉に何か異変が発生したときの緊急停止ですね、これは五〇回が限度といわれてるらしいんです。五〇回も緊急停止をやったらもう原子炉としては終りなんですね。それと同じことを一日に二度ずつやろうというんですから……言葉もありませんね。⑧

—その他に心配されることは……。

平井　ペレットが熱の影響を一番先に受けるんですね。それに対して、ジルコニウムのさやが熱の影響を受けるのがあとになるんです。このため、ペレットがさやを内側からふくらませる。このために放射能が洩れたり、もっとこわいのは、膨張したさや同士がくっついて水を通す隙間がなくなる。そうすると互いの高温であっという間に溶け始める。ジルコニウムは一九〇〇度で溶けますからね。

—制御棒の方の問題はありませんか。

平井　基本的には制御棒の上げ下ろしでの調整はしないといいましたが、初期の段階ではやるんですよ。そうしますとね、これまでだったらめったに上げ下げしなくてよかった制御棒が毎日二回は上げ下げされますから、制御棒のいろんな案内桿等々がですね摩滅するということも考えられます。

制御棒がうまく動かないと大変なことになります。チェルノブイリの場合は、制御棒がうまくおりなかったんです。⑨

—現場での運転者の緊張というものも大変なことになるでしょうね。

平井　それが一番心配ですよね。一週間から一〇日間をかけて、ゆっくりと反応を見ながら立上らせていたのを、1時間とか3時間でやろうというんですから、大変な緊張でしょう。こんなことに人間が毎日耐えられるかという問題があります。しかも、いったん制御に失敗すれば秒単位以下で暴走しますからね。人間の対応能力を超えてるわけですよ。⑩

ですからね、これまで通りの厳しいチェック体制ではとてもやれないから、どんどんチェックポイントを解除してるんです。条件を緩和してるんです。⑪

—ゼノンの毒

平井　私が何よりも心配しているのは、「ゼノンの毒」という問題なんです。これもチェルノブイリの事故で大きなポイントになった点なんです。

原子炉を止めますとね、それからゼノンあるいはキセノン一三五というのがふえてくるんです。正確にいいますとね、核分裂の過程でヨーソ一三五というのが出てくる。チェルノブイリで有名になったのはヨーソ一三一ですね。それとは別のヨーソ一三五がベーター線を出して、キセノン一三五になる。

だいたい運転を停止して10時間ないし11時間でキセノン一三五は最大量になる。⑫

このキセノンの特徴は、ホウ酸と同じように中性子を吸い取るんです。そこでですね、まだキセノンがあるときに（つまり、停止後20時間くらい）出力を高めようとすれば、制御棒を上げたり、ホウ酸を薄めたりしなければなりませんね。分りますか。キセノンが中性子を吸い取る分だけ、制御棒やホウ酸の役割をおさえないと、中性子が三重に吸い取られて出力が上がりませんからね。

ところが、まだキセノンが沢山あると思って、制御棒を上げてしまったら実際にはキセノンはそんなになかったとしたら、どうなりますか。一気に出力が上がってしまって核暴走になりますよ。チェルノブイリの事故の第一原因はまさにこれだったんです。

だから、キセノンがなくなってしまう20時間は少くとも運転再開しちゃいかんのが、出力調整だと、1時間で50％に落として8時間運転し、また1時間で立上らせるとなると、ちょうどキセノンのピークに立上らせるということになる。これがこわいですね。

私はもう出力調整運転をやることにより、一〇〇倍以上に事故の確立は高まると思いますね。

—原発不用

—結局、そんな危険をおかしてまで出力調整をやるのも、原発をふやしすぎたからですが、電力会社がいうように、本当に原発なしではやっていけないんですか。

平井　まっ赤な嘘です。数字をあげましょうか。86年8月を例にとりますと、電力九社の供給力は一三一五八・二万kwでした。これに共同火力など他社供給分一六五八・六万kwが加わりますから、全供給力は一四八一六・八万kwあったことになります。

ところで、この8月の需要の最大3日間平均が九四九六・四万kwです。差引きして、なんと日本全体では五三二〇・四万kwも余っていたことになりますね。電力を一番使った日にも、こんなに余ってたことになります。二〇〇万kwの発電所にして五三個分も余っていたわけですから、日本の原発を全部なくしてしまってもまだ余っていることになります。⑬

—それにもかかわらず、電力会社は電力の40％は原発ですといいますね。

平井　火力を休ませているんですよ。九電管内でいえば、川内火力の利用率が八・七％、豊前火力が六・七％、苅田火力に至っては0％といった有様で、むりに原発を動かしてるわけです。